

## 目の見えない犬を助けた物語

この心あたたまる物語は、平成5年の夏に始まりました。

松山市の吉藤<sup>よしふじだんち</sup>団地の横を大川という川が流れています。その団地に住む5歳<sup>くぼたのぞみ</sup>の窪田望さんと石井<sup>いしいのぞみ</sup>希さんは、川に捨てられているボール箱がわずかに動くのに気づきました。

しかし、水の流れは速く、団地の自治会長の坂本<sup>さかもとよしかず</sup>義一さんをお願いしてその箱を拾いあげてもらいました。

箱の中には小さい犬がいました。生まれて間もない犬は、ぶるぶるふるえ、小さな声でクンクンと鳴きました。

望さんは子犬を抱いて「もう大丈夫、助けてあげるからね。」と子犬にいきかせました。

「この子犬は歩けるのだろうか。」と子犬を地面に下ろすと、くるっと回って、すぐに倒れてしまいました。坂本さんは「この犬はへんだぞ、きっと目が見えないんだ。」望さんは子犬を家<sup>つれ</sup>に連れて帰り、お母さん<sup>かえ</sup>に家で飼うようにたのみました。しかし、「かわいそうだけど、団地のきまりで、ペットは飼えない。だめです。」ときっぱりことわられました。

いまさら目の見えない犬をみずてることはできない。望さんと希さんは同じ団地に住む6年生、5年生、3年生のお友達に相談しました。そして、おとなたちにひみつで自転車置き場のすみで飼うことにしました。ところが4・5日して団地の人たちに見つかってしまいました。望さんはお母さんにおこられました。「子犬を団地で飼ってはいけないのに、どうしてひみつで飼ったの。」「だって、あの犬目が見えないのよ。わたしたちが世話をしなければ死んでしまうよ。」

なんとかしなければならぬ。望さんは子犬を抱いて、団地のお友達と自治会長の坂本さんをお願いにいきました。「どうしても、この子犬を育てたいのです。」しかし、坂本さんは「団地のきまりだから」と受け入れてくれません。望さんはもう一度「この



校庭にある「ダン」の話

子犬は育てる人がいなければ、すぐ死んでしまいます。お願い、わたしたちが世話をするから団地においてください。」とたのみました。坂本さんは困ってしまいました。

そのとき望さんは、「<sup>もうどうけん</sup>盲導犬は、目の見えない人を助けてくれるのに、目の見えない犬は、どうしてすてられちゃうの。」このことばを聞いて、坂本さんは決心しました。

「きまりはきまりだけれど、みんなに相談してみよう。」しかし、団地の人たちはやはり反対しました。一度きまりを守らない例をつくると団地のきまりが次々とくずれていくことを心配したのです。

それでも坂本さんは子犬にたいする子どもたちの<sup>あつ</sup>熱い思いに<sup>せなか</sup>背中を押され<sup>うご</sup>動きまわりました。

「この子犬は目が見えません。捨てられたら死にます。子どもとわたくしで、責任を持って育てます。どうか団地の横の広場で飼わせてください。」と団地の人たちに何度も頭を下げてまわりました。

団地の人たちは、坂本さんと子どもたちの必死な願いに心打たれ、とうとう団地で飼うことに<sup>さんせい</sup>賛成しました。

望さんたちは、団地で飼うので「ダン」と名付けました。早速、坂本さんと子どもたちは、ダンの小屋をつくりました。

そののち、団地の人たちはもちろん、望さんたちの通う<sup>しおみ</sup>潮見小学校のお友達も、ダンをあたたかく見守り、応援するようになりました。

<sup>えひめ</sup>愛媛子ども<sup>ぶんかきょうかい</sup>の文化協会は、毎年「紙しばい」を全国から<sup>ぼしゅう</sup>募集しています。望さんと希さんは小学校2年生のとき、二人で相談して、ダンのことを紙しばいにして、このコンクールに出すことにしました。

お話は望さんがかき、絵は希さんがかきました。二人はその紙しばいをダンに読み聞かせてから出しました。

しばらくして、今年の子ども部門の<sup>さいゆうしゅうしょう</sup>最優秀賞になったといううれしい手紙がとどきました。さっそく、そのことをダンに報告しました。

表彰式で、その紙しばいを発表したあと、新聞社やテレビ局は「二人の少女と目の見えない犬のこころあたたまる物語」「目の見えない犬を二人の少女と自治会長さんや少女が通っている学校がたいせつに育てている。」と<sup>ほうどう</sup>報道しました。

すると、たくさんの手紙が、潮見小学校や坂本さんのところへ届きはじめました。

学校に届いた手紙やお金は、教頭先生があずかってくださいました。教頭先生は手紙を送ってくれた一人一人に、こころをこめてお礼の手紙を出しました。ダンのことを心配してくれる手紙を読んで、ありがたく、うれしくて、なみだがあふれそうになって、

手紙がなかなか書けないこともありました。

校長先生は、全校集会でそれらの手紙を子どもたちに紹介しょうかいしました。

京都のあるおばさんは、はるばるダンをたずねて来て「ダンちゃんいつまでも元気ががんばってね。ばあちゃんは、あなたの目が見えるようになるまで、毎日お祈りしているからね。このお守りは、目をなおす、お宮のおまもりなのよ。」そのお守りをダンの小屋の入り口へはりつけました。

このように、目の見えない犬ダンを中心にして、たくさんのやさしい心の輪がどんどん広がっていきました。

平成17年11月には、「ダン」にまつわるこのやさしい心をいつまでも大切にしようという意味で「ダン」の像が潮見小学校の校庭せっちに設置されました。



なお、この「ダン」の像から20メートルはなれた校門の近くに校舎より高くすくすくと伸びた杉の木があります。

これは、昭和38年、潮見小学校が青少年赤十字に加盟したことを記念して、当時の金崎久男校長先生が植樹したものであり、赤十字のシンボルといわれている、イタリアのソルフェリーノの丘の「いとすぎ」であります。愛媛県には現在この木しかないめずらしいものであるが、この木が潮見小学校の子どもたちをあたたく見守りつづけています。

H18.3.19 撮影

**「イトスギ」の前で  
金崎久男先生と子どもたち**

お世話になった方

潮見小学校長

加藤 和子

参考にさせていただいた本「目の見えない犬ダン」

大西伝一郎著 学習研究社